

## 今日の説教のポイント <使徒言行録 16 章 35～40 節>

### ①信仰は「私の心の平安」を祈るだけのものではない！

信仰者となった看守はパウロが釈放されることを喜んで、「安心して行きなさい」という信仰者独得の表現を使って伝えました(36 節)。「神様が助けて下さったのだ。感謝!」、そう思ったことでしょう。しかしパウロは、「不当な鞭打ち刑を与えた高官自身が来て謝るべきだ」と予想外なことを言いました。ちょっと傲慢な感じがしますか? そうではありません。キリスト教が町を混乱させるものではない(20 節) ことをはっきりさせておかなければ、この後フィリピの信徒たちが困るのです。ここで教えられることは、信仰は「私の心の平安」を祈るだけのものではないということです。小心や人気取りや欲望のために為政者が不正をなすことが問題なのであり、パウロはそれから目を逸らしていることのできる信仰者ではなかったのです。問題は、一体、どうしてパウロがこのように大胆になれたのかです。

### ②イエス様が私たちのために負って下さった苦しみを思うとき！

イエス様はむごい仕打ちを受けても黙って十字架に向かわれ、むしろ「父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ 23:34) と祈られました。パウロは、「その彼らとは自分のことだ」と思い知らされた人です。と同時に、主イエスの復活によってその自分の罪(原意: 的を外して矢を射ること: 神の方を向いて生きていないこと)を神様が赦して下さったということも、深い感動をもって知った人です。神様に赦され、生かされていることを知って、神と共に生き直し出したパウロですから大胆になれるのです! 主の苦しみを思い、いわば、それに連帯させていただく、否、いただける! そう思って生きる時に持てる大胆さです。ですから、今日の箇所でのパウロの言動は傲慢さなどとは縁遠いものなのです。パウロはこう言っています、「私たちは以前フィリピで苦しめられ、辱められたけれども、私たちの神に勇気づけられ、激しい苦闘の中であなたがたに神の福音を語ったのでした」(Iテサロニケ 2:2、IIコリント 1:4 以下も)。戦時中に海岸教会の鐘を守り通された渡辺連平先生のことを思い出しました。私たちも同じ大胆さを持てるようになりたいものです。